

学思

86

2026 年 4 月～6 月

「学びて思わざれば則ち罔く、思いて学ばざれば則ち殆し。」——『論語・為政篇』



目次

- センター長のコラム.....2
- 活動報告.....3
 - ・ 2026 年度希平会第 1 回連絡会
 - ・ 2026 年度 BRIDGE Fellowship Program 選考結果
 - ・ 2027 年度二国間交流事業募集案内
- 活動記録 (2026 年 4 月～6 月)4
- 編集後記.....6



JSPS BEIJING
OFFICE

学振創立 100 周年に向けて

日本学術振興会（学振／JSPS）の新たなプロモーション動画が公開されました。学振は 2032 年に創立 100 周年を迎えますが、この動画では、100 年近くにわたって積み重ねられてきた学振の歩みを振り返りながら、学術研究の振興に寄せる熱い想いと使命感を力強く訴えるものとなっています。また、動画制作にあわせて、創立 100 周年を記念する「100 周年ロゴ」も制定されました。100 周年に向けた機運を高める象徴として、多くの人々に親しまれることを期待しています。



創立 100 周年を記念した「100 周年ロゴ」

ところで、創立 100 周年に向けた理事長肝いりの企画の一つに、記念誌の編纂があります。この記念誌は単なる周年事業の成果物ではなく、将来にわたって学術的検証にも耐えうる資料となることを目指しており、科学史・政治史・科学技術政策を専門とする研究者を中心に編纂が進められています。昨年、その中核となって作業を進めている研究者の方とお会いする機会がありました。その際、「学術的価値の高い記念誌を完成させるには残された時間があまりにも短い」と率直な胸の内を明かされていましたが、それでもなお、より良いものを世に送り出そうという強い使命感が伝わってきました。

私がこの記念誌において特に関心を寄せていることの一つは、戦時下の学振がどのように描かれるかという点です。1932 年に学振が設立された当時、日本は世界恐慌の影響を受け、社会全体が厳しい状況に置かれていました。その難局を克服するための根本的な国策として求められたのが学術研究の振興であり、学振はその期待を担う中核的な学術振興機関として発足しました。

しかし、1937 年に定められた事業方針において「小問題の解決より国家的重要問題に力を集中する」とされたように、戦時色の強まりとともに、研究活動の重点は産業的・軍事的要請に応える実用的な工学研究へと移っていきます。さらに 1938 年の国家総動員法施行を契機として、この流れは一層強まることとなりました。その結果、1945 年の敗戦による戦時体制の解体に伴い、学振の国家的な学術振興機関としての性格は否定され、1948 年には学振への文部省からの補助も打ち切られています。

では、戦時中の学振は軍産学複合体の一翼を担い、「科学技術の戦時動員機関」として軍事研究の推進に終始していたのでしょうか。学振の初代理事長であった櫻井錠二は、1939 年 1 月の日本学術振興会第 7 回委員総会において、「基礎科学への投資を怠れば、将来必ず世界の趨勢から取り残される」と警鐘を鳴らす一方、「組織や専門分野の壁を越え、日本中の英知を結集して国家的課題に当たらなければならない」と訴えました。あらゆるものが戦争に動員されている時勢にあっても、基礎科学の重

要性を見失わず、学問の力によって社会や人類の福祉に貢献しようとする理念もまた確かに存在していたのではないのでしょうか。科学技術と平和との関係が改めて問い直されている今日、100年の歴史を振り返り、その意義を後世へと継承していくことの重みをあらためて感じているところです。

本稿の執筆にあたっては名古屋工業大学准教授の山中千尋氏から有益なご助言を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

(参考文献)

日本学術振興会『日本学術振興会 30 年史』日本学術振興会 1991 年

山中千尋『日本学術振興会の設立に関する研究』風間書房 2023 年



プロモーション動画

https://mp.weixin.qq.com/s/dw5qFjq3z1-M_SokoXRUDQ

センター長 山口英幸

活 動 報 告

2026年度希平会第1回連絡会を開催

2026 年 4 月 16 日（木）に中国に事務所や拠点を持つ日本の大学等機関を中心とした「希平会」の 2026 年度第 1 回連絡会を開催しました。今回は上海での開催となり、会場となった名古屋大学中国交流センターには 10 機関から 16 名が参集し、オンラインでは 22 機関の参加がありました。

佐藤会長によるオンラインでの開会挨拶では、優秀な中国の学生が日本の大学で学べなくなっている状況に言及しつつ、こういった状況をオールジャパンで打開し日中の学術交流を推進していきましょうとの話がありました。大学からの活動報告では、新規に入会した北海道医療大学と会場を提供した名古屋大学からそれぞれの活動状況等について報告がありました。

続いてのセッションでは、まず上海市科学学研究所の周少丹フェローから「中国一流大学における社会寄付の受け入れと資金運用について」という演題で講演があり、中国の大学のファンディングの最新の動向の説明と、今後の可能性をめぐっての日本への示唆がなされました。



挨拶をする駐上海総領事館の神田将司領事（最前列右）



挨拶をする名古屋大学の張紹良中国交流センター長

続いて科学技術振興機構 (JST) 北京事務所の茶山秀一所長から、「世界の論文データの動向 - 協力・交流をどう考えるべきか -」という演題で講演があり、「自然科学の多くの分野は、中国なしではもはや不可能」となっている状況において、中国との協力や交流はいかにあるべきかとの問題提起がなされました。

今回は、2018年に上海総領事館にて連絡会が開催されて以来2度目の上海での開催となり、上海を拠点とする大学との情報交換や親睦を深めるよい機会となりました。



参加者

活動記録

(2026年4月~6月)

4月

- 12日 ACS150 JACS Symposium 出席



京都大学・北川進教授と

- 14日 大阪大学東アジア拠点訪問、元日本学術振興会研修員訪問



大阪大学東アジア拠点・徐職員と

- 15日 在中国日本大使館上海総領事館訪問、在上海日本人研究者との交流会



在中国日本大使館上海総領事館・神田領事と

- 16日 大阪公立大学上海事務所訪問、名古屋大学上海事務所訪問、希平会連絡会開催



大阪公立大学上海事務所

- 18日 朝陽義塾見学交流会参加
21日 科学技術懇親会出席
22日 広報文化十一者会出席、一橋大学訪中団報告会(オンライン)参加、共同通信社来訪
23日 日本商會会合出席
28日 在中国日本大使館来訪
29日 富士フィルム訪問

5月

- 12日 理化学研究所と一橋大学との交流会開催、東京科学大学研究者との交流会出席
13日 富士フィルム来訪

- 18日 在中国日本大使館との打ち合わせ
19日 希平会交流会出席
27日 広報文化十一者会出席
28日 日本商會会合出席、広報文化十一者会懇親会出席
29日 国際協力員へのブリーフィング(オンライン)、北京日本倶楽部文化講演会参加

6月

- 1日 JSPS 本部訪問
23日 広報文化十一者会出席
25日 天津大学日本人研究者訪問、北京協和医学院日本人研究者訪問
26日 島根大学・寧夏大学国際共同研究所一行来訪
27日 在中国日本大使館主催日本留学説明会

2026年度BRIDGE Fellowship Programの選考結果について

本会の外国人特別研究員事業等に採用されて来日し、日本での研究活動を終了した外国人研究者を対象として、再度来日して日本人研究者との研究協力関係を形成・維持・強化する機会を提供する、外国人研究者再招へい事業（BRIDGE Fellowship Program）を行っています。

対象分野は人文・社会科学及び自然科学の全分野です。渡航費、滞在費、海外旅行保険料を支給するほか、採用期間中の活動経費として調査研究費を申請することが出来ます。

【JSPS 中国同窓会】申請者数：21 名、採用者数：4 名

再招へい研究者		日本受入研究者
氏名・所属機関・職名	研究テーマ	氏名・所属機関・職名
陳尧 四川大学建築・環境学院、副研究員	Very high cycle fatigue of friction stir welded magnesium alloys	植松美彦 岐阜大学工学部、教授
郭利民 华中科技大学環境科学・工程学院、教授	The research of $\text{Co}_3\text{InC}_{0.75}\text{-In}_2\text{O}_3$ catalysts for CO_2 hydrogenation into methanol	椿範立 富山大学工学系研究科、教授
郝建穎 中国海洋大学情報科学工学部物理・光電子工学学院、准教授	ベクトル渦ビームを用いた偏光多重ホログラフィックデータストレージに関する基礎研究	Boaz Jessie Jackin 高知大学理工学部、教授
銭昆 北京理工大学医学科学・工程学院、教授	精神保健を対象とした閉ループ制御型音声大規模モデルに関する研究	河原達也 京都大学情報学研究科、教授

【JSPS 韓国同窓会】申請者数：2 名、採用者数：2 名

再招へい研究者		日本受入研究者
氏名・所属機関・職名	研究テーマ	氏名・所属機関・職名
Jiyoung KANG 釜慶大学校自然科学大学科学コンピューティング学科、准教授	エネルギー制約下の Active Inference：自由エネルギー原理の枠組みにおける神経集団ダイナミクスと脳代謝の架橋	磯村拓哉 理化学研究所脳神経科学研究センター脳型知能理論研究ユニット、ユニットリーダー
金澤中 延世大学生命科学技術学部、教授	CryoEM を活用した天然物の機能解析	前仲勝実 北海道大学大学院薬学研究院、教授

2027 年度 JSPS 二国間交流事業（共同研究・セミナー）事業案内

対応機関	中国科学院（CAS）		中国社会科学院（CASS）	国家自然科学基金委員会（NSFC）	
対象分野	自然科学		人文学、社会科学	自然科学	
実施形態	共同研究	セミナー	共同研究	共同研究	セミナー
採用予定件数	3	2	1	20	4
支援期間	3 年間	1 週間以内	1 年～2 年 9 ヶ月	2 年 9 ヶ月	1 週間以内
採用状況 (2025 年度)	申請数 16 件 採用数 3 件	申請数 1 項 採用数 1 件	申請数 7 件 採用数 1 件	申請数 170 件 採用数 20 件	申請数 28 件 採用数 4 件
連絡先	中国科学院 国際合作局亜非処 Tel: 010-6859-7480 Email: htchen@cashq.ac.cn		中国社会科学院 国際合作局亜非処 Tel: 010-8519-5139 Email: limj@cass.org.cn	国家自然科学基金委員会 国際科研事業部 Tel: 010-6232-5452 E-mail: sunlinhao@nsfc.gov.cn	

※中国の研究者は対応機関に申請書を提出する必要があり、上記の三つの対応機関の担当部局に必ず連絡してください。

編集後記

この号をお届けするまで、山あり谷あり山脈あり断崖ありでした。まずは嬉しい出来事。なんと8年ぶりに「希平会」を上海で開催し、大学事務所も訪問することができました。さらに、上海と天津では日本人研究者との懇談会も開催。現場ならではの貴重なご意見をたっぷり伺うことができ、大変有意義な時間となりました。

そんな合間を縫って私はカシュガルからパキスタンへカラコルム・ハイウェイで国境越えを敢行しました。標高4,000メートル超、周りは岩、崖っぷちの道路、落石事故や転落事故が絶えない、危険だけど三蔵法師も歩いた憧れの道です。ところで皆さん、中国の高速鉄道や飛行機に乗ると、「中国人、荷物多くない？」と誰もが一度は思うはずです。しかし、パキスタン人は中国人を軽くぶつちぎる量の荷物をバスに載せていて、また一つ世界の広さを実感しました。

そんな日々を終え、6月某日。私はまさかの胃腸炎から急性腎不全という、人生最大のピンチを迎えました。1ヶ月間の緊急入院（今はこうして元気にコラムを書けるまで回復しましたのでご安心を）。振り返れば、仕事で駆け抜け、山を越え、国境を越え、最後は病院のベッドにたどり着くという、なかなか濃密な3カ月でした。中国のデリバリー（外卖）は、心も胃も喜ばせますが、油断すると命も奪います。皆さま、夏の外卖にはご注意ください。

副センター長 今城佳奈子

日本学術振興会 北京研究連絡センター
JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE BEIJING OFFICE

北京市朝陽区東三環北路5号 北京発展大廈 1021 室

Tel: + 86-10-8882-4331 E-mail: beijing@jsps.org.cn URL: www.jsps.org.cn



WeChat